

グローバル 知の鎖国を解き、全球教育を

開学わずか6年で有名私大並みの学力と100%の就職率



先の見えない超就職氷河期、大学生の就職内定率平均は60%を下回った。

この厳しい状況下で、毎年連続して内定率100%を達成している大学がある。国際教養大学(AIU: Akria International University)は、2004年秋田市郊外に設立された秋田県の公立大学法人である。開学以来わずか6年の若い大学であるにもかかわらず、大手予備校・代々木ゼミナールの偏差値ランキングでは、文・教・外といった学部で早稲田や慶應と並んで堂々の最高点をマークし、河合塾の国公立の国際関連の学部としても筑波大と並んで最高位にランクされている。

いわゆる旧帝大や有名私立大のような歴史やブランド力があるわけではない。しかし教授陣の約半数が外国人、授業はすべて英語、1年間の海外留学など、国際教養大学の厳しい教育プログラムを修めた実績と学生自身の豊かな個性は、いま企業の求める人材像に合致し、採用担当者から熱い視線を浴びている。

グローバル人材の育成は、貿易立国・日本の将来にとって最重要課題の一つであり、そのための第一歩は大学自身のグローバル化である。

日本の大学教育が「知の鎖国」状態にあることに危機感を持つ中嶋嶺雄国際教養大学学長は、グローバル社会で通用する大学と人材の育成を目指して、同大学設立の準備段階から直接かかわってきた。

大学のグローバル化モデルとも言うべき国際教養大学の教育と経営について、中嶋学長にお話を伺った。(文・小林敏行)

中嶋嶺雄

公立大学法人国際教養大学 理事長・学長

就職内定率100%

国際教養大学は、「これまでの日本には存在しないグローバル・スタンダードの大学」を目指して2004年4月に開学された。秋田市街地から車で30分ほど、秋田杉の林に囲まれた大学キャンパスには高くそびえるメタセコイアの木々、秋田杉をふんだんに使った大きく立派な図書館、回廊で結ばれた校舎や学生寮などが立ち並ぶ。定員は1学年150名(2011年度より175名に増員)、1クラス15名前後の少人数教育を実践し、入学して1年間は全員が大学の敷地内にある寮で生活する。留学生や外国人教師らしき人々からすれば違いざまに何度も「コンニチワ」と挨拶された。昼食時の学生カフェテリアはまさにグローバル化を象徴する景観だ。

就職内定率60%の今の日本の大学の中にあつて、就職内定率100%は注目の的である。まずは、その辺りから中嶋学長に伺った。

「多くの企業から採用担当者が本学に来られて、就職セミナーを

開催していただいています。中にはその日のうちに面接し、採用内定を出す企業もあり、皆さん学生選が非常に個性豊かであると言つて下さいます。個性が豊かということとは、本人達もそれだけ苦労もしているわけです。卒業までに1年間の海外留学を義務付けていますが、単なる語学留学ではありません。ほとんどの学生が海外は初めての経験ですから、いきなり1年間海外の一流大学に行つて、単位をしっかりと取つてくるというのはなかなかの苦労です。

また、自分が黙っていたら全く面倒を見てもらえないのが外国です。現地に着いて、さまざまな手続きを自分でやるところから始まり、決められた単位をきちんと取るために必死で勉強する。それをやり遂げる過程でいろいろ体験し、コミュニケーション能力や交渉力などを学んでいくわけです。国際性と精神的なたくましさの点でひと回りもふた回りも大きくなって日本に帰つてき

ます。ディスカッションにしてもそれまでとは違った多様な見方ができて、どんどん自分の意見を述べています」

内定率100%はありがたいことだが、心配な点も出てきたと言う。

「最近、本学への志望動機の傾向として、国際教養大学は就職率が高いからという学生や親御さん



グローバル化を象徴するような昼食時のカフェテリア。

が増えていることです。就職は4年間の大学生活の結果であつて、本学は就職や資格取得のための大学ではありません。日本人として、国際人として真の教養を身に付けて卒業すること、そのためによく勉強することが大事であつて、その結果が就職につながるのだと口を酸っぱくして言っています」

今、日本では、就職活動の早期化が社会問題になっている。だが、学問そつちのけで活動することが問題なのであり、学生が自分の将来を自分で考えるのは大切なことだ。国際教養大学ではキャリア・デザインを学生の必修科目としている。自分の履修科目や学生生活がキャリアとどのように結び付くのか、卵の殻を自分で破つて生まれ出るように、自ら考えるきっかけを与えている。

カリキュラムにも学長のリーダーシップが

「大学にとって最も重要なのはカリキュラムです。どのような授業を提供しているかが問われます。企業社会では顧客にどのような優



EAPの授業風景。

れた商品を提供しているか、企業
の評価が決まるのと同じです」

カリキュラムは授業内容だけで
はなく、入学者選考と卒業の基準、
教職員採用、留学生制度から施
設・設備など大学経営そのもの
にかかわってくる。その作成には学
長のリーダーシップは不可欠であ
り、大学設立時に中嶋学長がリー
ダーシップを発揮したのは言うま

でもない。

国際教養大学は、国際教養を
教育目標として、カリキュラムは
基盤教育、専門教養教育そして
海外留学で構成されている。

基盤教育は入学直後からEAP
(英語集中プログラム)で基礎的
なコミュニケーション能力を養う。
TOEFLで500点以上が修了
条件だ。筆者が見学した1年生
の授業では「グローバル化の
最大のアドバンテージは何
か」をテーマにグループプレゼン
テーションをしていた。

「評論家の大宅映子さん
と本学のアドバイザーをお
願いしていたドナルド・キー
ンさんがEAPの授業を見
学に来られました。入学後
3〜4カ月の学生たちがイ
ラク問題を英語で議論して
いたのでとても驚いていまし
た。やらせようと思えばで
きるのです。こうしたテー
マで、英語でディスカッション
をしなければならぬとな
れば、おのずと日頃から政
治や世界情勢などのニュー
スにも関心を持ち、海外の

ニュース番組や英字新聞にも目を
通すようになる。大学の英語教育
にはEAPのような授業は当然必
要です。また、学生にとって図書
館は重要な役割を果たしますの
で、英語基礎に「英作文と図書館
調査手法序論」を追加しました」

基盤教育は インターナショナル・ リベラル・アーツ(国際教養)

基盤教育のカリキュラムは単に
必要な科目を並べただけではない。
経験的手法、量的論証、批判的
思考手法といった方法論をすべての
科目の共通基盤として組み込むこ
とで、専門領域を超えて幅広く物
事を見るリベラル・アーツ本来の教
育を目指している。

「本学の基盤教育のカリキュラム
は非常にユニークです。例えば、社
会科学の「人口学(demography)」。
21世紀の地球と国際社会にとっ
て、人口の爆発的な増加は非常に
重要な課題です。また、中国や
インドの人口はどうなるのか、日
本はどうかなど、各国は人口開
題にそれぞれ違った課題を抱えて

います。こうした問題を深く理解
することは、国際社会を理解する
上の基盤となります。『芸術・芸
術論』は世界的に有名なヴァイオ
リニストである渡辺玲子さんが特
任教授です。演奏を交えながら、
音楽の歴史や楽譜の作り方を講
義しています。『スズキ・メソッド・
アンサンブル』では幼児教育の重要
性を学ぶと同時に、外国語教育を
幼児教育と同様に耳から聞いて覚
えるようにする講義をやっています。
生に人気があります。

文系の大学ですが、サイエンス
分野では、生物学、化学、物理、
数学、微積分学など自然科学も
できるだけ入れていきます。統計学
では論文を書くときに基本的な
データを扱えるよう実践的なこと
も教えています。専門教育課程で
は、総合科目の中の「平和科学(紛
争予防外交論)」がユニークです。
これは安全保障論であり、元国連
事務次長の明石康さんが教えてい
ます。多くの大学では今最も大切
なことを教えていません。特に防
衛問題はタブー視されています。
しかし、それではグローバル時代
に世界の人々と対等に議論をした



(上)秋田杉をふんだんに使った立派な図書館。
(下)窓側のカウンター席に陣取って、一心に勉強する学生。窓外には美しく紅葉した樹々の向うに広大な林が広がる。

り、ビジネスで戦ったりすることなどできるわけがありません。その他にも東アジアや北米分野の地域研究をやっています。私自身の強い信念としてこのようなカリキュラムを入れています」

大学の経営システム

カリキュラムや教育プログラムの良し悪しは育成された人材の成果

で決まる。卒業生が期待レベルに達していなければ良いカリキュラム

を作つても意味がない。良い成果を生む上で、大学の人口と出口である入試と卒業を柔軟さと厳格さをもつていかに運用するか、優秀な教職員をどのように見極めて採用するかは極めて重要である。

国際教養大学の画期的な点は、大学経営の意思決定システムを見直し、経営会議を中心に置き、

教授会の役割を限定したことにある。

入試は本格的なAO入試^{*}だ。国立大学は苦勞しなくても学生を集めやすい立場にある。そのため入試はどうしてもお座なりになりがちだ。中嶋学長が東京外語大学の学長時代も反省すべきことが多々あったと言う。

「入試では本場のAO(アドミツションズ・オフィス)を作りました。議長は学長自身です。全国の高校の内申書を評価できる元予備校の役職者、TOEFLについて詳しい人、他の私学で入試改革に成功した経験者などの専門家を含めて、学長、副学長、教授も加わった数名で構成しています」

暫定入学制度も国際教養大学の特徴である。入試の総合点は合格ラインにわずかに届かないが特定の教科では抜群の成績だった学生を暫定的に入学させ、その後の成績次第で二年目に正式入学を許可する制度である。この決定も素早かった。暫定入試で入った学生は全員が進級し、むしろ非常に良い成績を残している。この制度は実は副学長だったグレゴリー・クラーク氏のアイデア。クラーク氏はかつて学長をしていたある私立大学でこれを提案してみたが、教授会の反対で実現できなかったという。教職員採用も、教授会ではなく、経営会議が最終的に決めている。

「教員の半数は外国人、教職員は3年間の任期制など他の大学ではやっていないシステムを採用しています。教職員の公募制も他の大学に参考にしてほしい。全世界に向けて公募すると、どんどん優秀な人材が応募してきます。日本の給与水準は高く、本学は公立大学ですが国立大学とほぼ同等です。今、イギリスも米国の教員は厳しいですから。そのためには我々もグローバル化が必要です。

設立最初の年は15名採用のところ、五百数十名の応募がありました。2カ月かけて他の先生や設立準備委員と3人組で面接しました。60人に絞り、面接に加えて模擬授業をやってもらいました。博士号を持っていることは第一条件ですが、国際教養の教育が目的の大学ですから、研究者としてどうかではなく、教育が上手くできるかどうかで判断します。日本の大学



なかじま みねお：1936年、長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士。国際社会学者。社団法人 才能教育研究会会長。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、アジア太平洋大学交流機構(UMAP)初代国際事務総長、財団法人大学セミナーハウス理事長、文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長・外国語専門部会主査)、内閣教育再生会議有識者委員、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授などを歴任。2003年度「正論大賞」受賞。「現代中論」(青木書店)、「中ソ対立と現代」(中央公論社)、「北京列伝(上・下)」(筑摩書房、くサントリー学芸賞受賞)、「国際関係論」(中公新書)、「音楽は生きる力」(西村書店)、「『全球(グローバル)』教育論」(西村書店)、「なぜ、国際教育で人材は育つのか」(祥伝社黄金文庫)など著書多数。

は教えることが主で、育てること
を忘れてるように思います。高
校の進路指導の先生方からは本学
が学生をきちんと育てているとこ
ろを評価していただいています。
人材を育てることは、極めて重要
な国家事業です。それができる人
かどうかは面接や模擬授業をやっ
てみると大体分かります」

* A O入試とは学校側の求める学生像(アド
ミッション・ポリシー)と出願者の人物像を照ら
し合わせて合否を決める入試方法。

大学改革とはカリキュラム改革

2004年にすべての国立大学
が法人化され設置形態や予算執
行の仕組みが変わった。ところが、

グローバル化の急激な進展にもか
かわらず、それに対応した大学
改革は進んでいない。依然として

ブランド、歴史、国立・私立と言っ
た設置形態が外向けの顔になっ
ていない。古いカリキュラムの下で
旧態依然として教えている人を思
い切つて換えない限り、グローバ
ル化に対応できない。しかし、実際
には多くの大学で十年一日の如き
講義が続けられ、同じカリキュラ
ムが温存されることになる。

「明治6年に東京外国語大学の
前身である東京外国語学校が神田
に設立され、岡倉天心、新渡戸稲
造、内村鑑三、嘉納治五郎といった
近代日本を担った錚々たる人たち

が入ってきました。彼らは外国人
から英語で英語を教わったのです。

しかし、今の日本の英語教育は
文法至上主義、90%以上が文法
と言つても過言ではありません。
英語はコミュニケーション・ツールで
す。ところがコミュニケーションが
得意でない人が英文学や英米文
学を教えてきたわけです。学生に
フォークナー(William Faulkner)
の小説を読ませ、訳させて、最後
にテストをやつて終わるのです。

これでは10年経けてもコミュニ
ケーション力は身に付きません。
カリキュラムの改革は教える側の
人の問題に行き着くので非常に厄
介です。しかし、そこをやらない
限り大学は良くなりません」

中嶋学長の指摘する大学変革の
問題点はまさに、ここにある。カ
リキュラムや入試制度、教職員の
採用などの大学の意思決定の仕組
みが変わらないところにある。そ
こには変わりたくない大学側のホ
ンネが見える。

大学のグローバル化

国際教養大学のカリキュラムは

国際的な互換性を持っている。例
えば、科目のインターナショナル・

コード。海外の留学生も国際教養
大学の学生も、留学した時にどの
ような授業を受けられるか事前
に調べることができる。100番
台のコードは易しい科目で400
番台は難しい科目というように、
これは難易度をグローバル・レベル
に合わせてコード化するため、大
学全体がグローバル化していないと
出来ない。

「日本の大学がグローバル化する
時の問題点の一つは入学定員です。
海外からの入学者が増える分、日
本人の入学定員が減ります。そ
こで外国人学生の募集人数を若干
名と表示して実質的に制限してい
ます。考え方がドメスティックなま
まなのです。

先ほど言いましたように本学
では1年間留学を課しています。
TOEFL 550点以上、GPA
(評価平均値) 2.50以上が留学
の資格条件で時期は本人の成績に
よりまちまちです。交換留学制
度として理論上は、全学生の4分
の1が提携先の大学に行き、同数
が本学にやってきました。現在31カ

国・地域の108大学と提携しています。

交換留学には授業料相互免除制度があり、本学生は国公立大学の年間授業料と同額を納めるだけで、通常何倍もの授業料がかかる米国の大学にも追加の授業料なしで留学できます。しかし、米国の大学にとっては損失ですから、事前に大学間で綿密に交渉して、お互いに損失のないよう交換人数を調整します」

このような交渉なしに留学生は集まらなかつただろう。国際担当セクションが夜中に電話やメールで交渉に当たっているという。まさにグローバル対応だ。

「私自身も世界各国の大学を回ります。つい最近ではルーミアのプラレスト大学に行きました。バリーニア州のウィリアム・アンド・メアリー大学、ウラジオストックの極東連邦総合大学なども、私自身が綿密な詰めをやった後で交換留学の協定を締結しました。

初めの頃、秋田の国際教養大学と言つても相手は名前も知らないわけですから、提携先を探すことは至難でした。そこで、東京外国語

大学の学長時代にUMAP*の事務総長をやっていた時のコネクションや、個人的なつてを頼りに提携大学を増やしていきました。現在は先方から提携したいと言ってくる大学が多くなり、こちらが選ぶまでになりました。また、先方からの留学生の評価も高く、後輩に推薦したり、留学期間を伸ばしたり、大学院にも進学するようになりました」

* UMAP: University Mobility in Asia and the Pacific (アジア太平洋大学交流機構)

鈴木鎮一先生と英語教育

中嶋学長には欠かせないヴァイオリン演奏という趣味がある。カリキュラムにも取り入れたスズキ・メソッドで特訓を受けた。

スズキ・メソッドは世界中に知られ実践されている才能教育運動である。創始者の鈴木鎮一は1946年から松本音楽院で子供たちにヴァイオリンを教え始めた。中嶋学長はその第一期生である。今でも忙しい時ほど夜一人になってヴァイオリンを弾く。アンサンブルが

できる楽しみもあり、海外に行つたときに人の輪が広がるという。

「高学年で始めましたから、生徒会活動やスポーツでなかなかレスンができません。鈴木先生にはそれを見透かされてしまいます。

「ヴァイオリンは1日弾かないと2日後退するよ。毎日、少しでも良いから練習しなさい」と言われました。これは教育の真理だと思えます。外国語教育には特に当てはまります。子供のときに繰り返し練習して身体と脳の両方を使って覚えた曲は70歳を過ぎても歌えたり、弾けたりするように、暗記と繰り返しは教育の原点です。しかし、声を出して朗読することはいつの間にか日本の教育から失われてしまいました。鈴木先生の言葉は英語学習においても一つの真理だと私は思います」

グローバル人材

国際教養大学には全員共通の必読文献がある。

「根無し草のようにただ世界に出ていく人をグローバル人材だとは思いません。日本人として自分

のアイデンティティーをきちんと持っていることが肝心です。本学では『武士道』を全学必読文献に指定しています。その他に学長推薦図書として6冊を私が自ら選びました。この中から2冊を読んで感想文を書いてもらいます。英語を学ぶことを通して、日本語の良さや美しさを知り、自分のものにすることも大事です。そして日本文化を再認識するとともに、日本人としての誇りを持ってグローバルな世界で活躍できる人になってほしいと思つています」

必読文献の『武士道』について中嶋学長が学生に向けた評言が付けられている。

「日本及び日本人の道徳的規範を日本の精神的土壌において解明し、国際社会にアピールした本書は、今の時代においても光彩を放つており、日本の文化的伝統を知るための古典的著書である。国際教養大学学生は、英語で書かれた原本と矢内原忠雄の名訳を在学中に必ず熟読して欲しい。」

国際教養大学の建学の精神、中嶋学長の大学人としての使命感が伝わってくる。